

逆説のレトリック

香 西 秀 信

1 定義への疑問

P・ヒューズ (Patrick Hughes) と G・ブレヒト (George Brecht) の二人は、逆説 (パラドクス) についての洒落た書物を次のような言葉で始めている。「パラドクスに関する文献は、あくまでもパラドクスを説明によって片付けてしまおうとするために魅力がそこなわれている⁽¹⁾。」私がこれから論じようとするのも、はなはだ「魅力がそこなわれ」たものになるだろう。修辞型式としての逆説がもたらすいくつかの逆説的な問題を、「あくまでも」「説明によって片付けてしまおうとする」ものであるからだ。

では、その逆説的な問題とは何か。これについて説明するためには、まず、逆説という用語に対して従来与えられてきた定義の批判から始める必要がある。ここでは、おそらく世界で最も利用されている二つの修辞学辞典の定義を引いてみよう。

「通念に反する意見。一見したところでは、とんでもない、非常識な物言いのように思われるが、よく考えてみると、事実に適っている主張。」

(H・モリエ、『詩学・修辞学辞典』)⁽²⁾

「一見自己矛盾的であるが、実は真実であることが (時には意表を突くやり方で) 示されている言説。」

(R・A・ランナム、『修辞学用語便覧』)⁽³⁾

細かな表現に違いはあるが、この二つの定義は根本的には同じものである。つまり、一般に、ある言語表現が逆説と呼ばれるためには、次の二つの条件が必要であるということだ。

- (1) 通念に反している (あるいは一見矛盾している)。
- (2) しかしながら、よく考えてみると、真実を言い当てている。

パラドクスという言葉はギリシャ語の *παράδοξα* に由来するものであり、その原義は、「通念」(*δόξα*) に「反する」(*παρά*) ということである。(すなわち、条件(1)と同じである。) しかしながら、修辞学用語の逆説の定義としては、これだけでは不十分である。なぜなら、ただ「通念に反している」というだけでは、単にナンセンスで奇矯な言説であるにすぎないからだ。逆説が逆説として完成するためには、どうしても(2)の条件が必

要である。したがって、現代の修辞学書が、大抵の場合モリエやランナム流の、上述の二条件をあわせもった定義を採用している⁽⁴⁾のも当然のことといえよう。だが、私はそのような定義に疑問をもつ。

第一に、逆説は「通念に反している」が、「よく考えてみると、真実を言い当てている」という。とすれば、「よく考えて」みた結果、通念のほうが間違いであったということになるのだろうか。具体例をもとに考えてみよう。ラ・ロシュフコー (La Rochefoucauld) の有名な『マクシム』 (*Réflexion ou sentences et maximes morales*, 1678) から逆説の例を引いてみる⁽⁵⁾。

90 われわれは、人との付き合いにおいて、長所よりも短所によって気に入られることが多い。(Nous plaisons plus souvent dans le commerce de la vie par nos défauts que par nos bonnes qualités.)

351 二人の間に愛がなくなってしまうと、別れるのがかえって難しくなる。(On a bien de la peine à rompre, quand on ne s'aime plus.)

どちらのマクシムも、当然ながら通念に反している。では、これらの逆説に納得する人は、通念を否定することになるのだろうか。「長所一人に好かれる、短所一人に嫌われる」というそれまでの通念に代わって、90の逆説が新しい通念として君臨するのだろうか。また、「愛がなくなる＝別れる」という古い通念を捨て、これからは「愛がなくなると別れにくい」と信じて生きるのだろうか。——そんな馬鹿なことはあるまい。たとえ人が上の逆説を読んで「なるほど、その通りだ」と感心したとしても、彼の通念は元のままである。つまり、逆説は「通念に反している」にもかかわらず、その逆説を受け入れる人においても通念はそのまま生き続けるのだ。先の定義では、この通念と逆説の逆説的な関係が説明できなくなる。

第二に、逆説は「よく考えてみると、真実を言い当てている」というが、逆説というものは真実として認められてしまうと説得的効果をもたなくなるのではないか。これについては、古代ローマの弁論家キケロ (Cicero, 106-43B.C.) の『ストア派の逆説』 (*Paradoxa Stoicorum*, B.C. 46) という格好の例があるので、それからいくつか引用してみよう⁽⁶⁾。

I 道徳的に高貴なものだけが善いものである。(Quod honestum sit id solum bonum esse.)

IV 分別のある者だけが富める者である。(Solum sapientem esse divitem.)

この書物は、キケロが、ストア派の用いた逆説について解説を加えたものであるが、これを読んだ人は、いったいこれのどこが逆説かといぶかしく思うであろう。念のため

に言っておけば、キケロは逆説について、「人を驚かせ、通念にも逆らっているような⁽⁷⁾」(admirabilia contraque opinionem omnium) 意見と説明しているので、現代と逆説の意味が違っていただけでもない。要するに、当時としては逆説的な意見であったものが、時代と共にその言葉の真実性が認められ、今日では常識的で平凡な意見になってしまったのだ⁽⁸⁾。ではそのように真実と認められた逆説は、今日のわれわれに対して何らかの説得的効果をもたらすであろうか。ここで逆説のもつもう一つの逆説的性格が明らかになる。先にも述べたように、逆説は「通念に反している」だけでは何ら説得力をもたない。それだけではただの奇矯な意見にすぎないからだ。逆説が逆説としての効果を發揮するためには、やはり「真実を言い当てている」必要がある。ところが、その逆説で述べられたことが真実であると認められてしまうと、今度はまたその逆説は説得的効果を失ってしまうのである。

2 「逆説＝対義結合」説批判

では、現代の修辞学理論においては、上述した問題はどのように処理されているのだろうか。実を言えば、多くの修辞学者にとっては、そのような問題そのものがそもそも存在しないのである。なぜなら、彼らは逆説を一つの独立した修辞型式として認めず、対義結果 (oxymoron) という別の修辞型式と同じものであると考えているからだ⁽⁹⁾。対義結合とは、これもモリエの定義によれば、「矛盾した、本来ならば互いに相入れないように思われる二つの語を結びつけた、対照法の一つ⁽¹⁰⁾」である。慣用表現の中から具体例をあげてみると、「公然の秘密」「有難迷惑」「うれしい悲鳴」のような表現である。

それではなぜ逆説は対義結合と同じものであると考えられるのか。また、それによって、なぜ先にあげた問題が回避されるのか。ここでは「逆説＝対義結合」説を主張する研究者のうち、佐藤信夫氏の説をとりあげて検討してみることにしよう。佐藤氏は、まず、通念とはどのようにして確認されるものであるかということから考察を始める。

もともと通念だの思想だのというものは、これがそうでございますというかたちで、それ自体を手にとってみることなどできないものであろう。けれども、通念の体系を見る一つの方法は、その社会で容認されていることばがいの組織状態を眺めることである。これは、あまりにも見のがされているばあいの多い、しかし重要な事実ではないか。あえてやや誇張ぎみの言いかたをしてみると、通念とは、実際に観察可能な現象としては、ことばの意味の《接続》制度として存在するものなのだ。

(中略) すこぶる単純な例について見るなら、通念は、例えば「愛」という名詞に対してはふつう好ましい意味のことばを接続することを要求し、「憎しみ」には好ましくない意味のことばを連結させたがる。ために「あたたかい」、「気高い」、「さわやかな」……といった形容詞を添えてみると、その暗黙の規則があらわになる。—「さわやかな＝憎しみ」、「憎しみとはさわやかなものである」というような文句に、私たちはめったにお目にかかることがない—。あるいは、「人間性」と「野獣性」に対する、

「ゆたかな」、「ほのぼのとした」、さもなければ「おぞましい」などということばの接続関係を実験してみれば、やはり暗黙のうちに作用している《意味の接続》規則があきらかになるだろう⁽¹¹⁾。

このように、通念を「暗黙のうちに作用している」「意味の《接続》制度」と規定すれば、逆説とは要するに、「意味接続の暗黙の規則への反逆⁽¹²⁾」にほかならない。したがって、「けつきよく、《逆説》は、言語現象としては、《対義結合》にそっくりなのだ⁽¹³⁾」という結論になるのである。つまり、例えば「公然の秘密」という対義結合においては、「矛盾した、本来ならば互いに相入れないように思われる」「公然」と「秘密」が結びついている。それでは逆説も、先の90の例でいえば、「短所」と「気に入られる」が「意味接続の暗黙の規則」に反して結びついた、対義結合と同様の言語表現であると考えることができるのではないかというのである。

逆説を、対義結合と同じものとしてとらえる立場に立てば、私が第一章で述べた二つの問題は生じない。

第一に、対義結合においては、「見かけ上矛盾している対義項どうしが、じつは真正面から対立し合っているのではなく、それぞれにニュアンスを変えて微妙に両立し合っている⁽¹⁴⁾」と考えられる。これは当然のことで、「公然」と「秘密」が本来の意味のまま結びついているのであれば、それは単なる無意味な矛盾にすぎない。もし、「公然の秘密」という表現が有意味な言語表現として成立するのであれば、そこには何らかの意味の変化が生じていると見なさなければならぬ。同様に、「われわれは、人との何き合いにおいて、長所よりも短所によって気に入られることが多い」という逆説においても、「短所」と「気に入られる」は意味を変化させて結び付いていると考えられるのである。したがって、この逆説に納得したからといって、「長所一人に好かれる、短所一人に嫌われる」と言う通念を否定することにはならない。逆説と通念は「微妙に両立し合っている」からである。これで、一番目の問題は解決できる。

第二に、逆説を対義結合と同じものと考えられるようになったのは、何よりもそれを「意味接続の暗黙の規則への反逆」と定義したからである。これは、ギリシャ語のパラドクスの原義そのままに、条件(1)のみを逆説の定義としたことになる。つまり、条件(2)は逆説の必須条件と認められてないわけであるから、二番目の問題はそもそも生じようがない。

しかし、この「逆説＝対義結合」説は本当に正しいのだろうか。私には、むしろ今あげた二つの議論がそのままこの説の弱点になっているように思われる。

第一に、対義結合においては、確かに結合する語の意味に「変化」が生じているが、逆説の場合は、それを構成する語は本来の意味を保っている。「公然の秘密」や「うれしい悲鳴」と違って、「われわれは、人との付き合いにおいて、長所よりも短所によって気に入られることが多い」における、「長所」「短所」「気に入られる」などの言葉は、本来の意味を変化させて用いられているのではない。これは、「二人の間に愛がなくなってしまう

うと、別れるのがかえって難しくなる」の例においても同様である。むしろ、本来の意味のまま、通念に真っ向から対立しているがこそ逆説なのだといえよう。この点で、グループμの研究者たちが、対義結合を「語義変換」(métasémème)、逆説を「論理変換」(métalogisme)と分類した⁽¹⁵⁾のは卓見である。語義変換とは文字通り語の意味を変えることであるが、論理変換は、「我々のものの見方を改変することはできても、しかし語彙体系を乱すことはない。それどころか論理変換は、国語の現状を問題とすることなく、それをそのまま自らの条件とする。論理変換が知覚されると同時に、語を『本義的』と言われる意味で理解することが必要となる⁽¹⁶⁾」ものである。このように、逆説と対義結合とは、語の意味を変化させるか否かという点でまず食い違う。

第二に、「逆説=対義結合」説では、逆説を単に通念に反するという点でしかとらえていないが、既に第一章でも述べたように、それだけでは非常識な物言いはすべて逆説になってしまう。しかし、ある言語表現が逆説としての効果を発揮するためには、ただ通念に反しているだけでは不十分で、やはりそこに何らかの「真実」があることを読者が納得する必要がある。対義結合と逆説の読まれ方を比較してみれば、この事情はより明確になる。われわれは、対立する二つの語を組み合わせ、どんな対義結合でも自由に作ることができる。「幸福という不幸」「飽食という名の飢餓」「醜悪な美貌」……どんな組み合わせを作っても、そのいかにも思わせぶりなかたちから、読者はそこに何らかの意味を読み込んでくれる。「筆者が故意に不整合や伝達に値しない言葉を主張するはずはないという推定を通して、読者は筆者に対する何ほどの善意の証しを立てて(témoignant d'une certaine bonne volonté à légard d'un auteur)⁽¹⁷⁾」くれるのである。しかし、逆説の読者はこのように親切ではない。もちろん逆説においても、その効果は作者と読者の「共謀」(la connivence)によるものであり⁽¹⁸⁾、あらゆるアフォリズムがそうであるように、「最後の仕上げを読者の思索に任せる⁽¹⁹⁾」(die Ausführung dem denkenden Leser überläßt)ものである。ただ、逆説の場合は、読者はそこに述べられている矛盾が十分に解決されなければ納得してくれないのである。例えば、ラ・ロシュフコーに次のようなマクスİMがある。

ME29 退屈も度を越すと退屈しのぎになる。(L'extrême ennui sert à nous désennuyer.)

私はこの逆説にまったく説得されない。なぜなら、私自身にはここで述べられたような経験はないし、それがどのような事態をさすのか想像もできないからである。が、これが、例えば何かの小説で「彼の話は私に愉快的な退屈を与えた」という対義結合を読んだ場合には、私はその意味するところが正確に把握できなくても、こだわらずにそのまま読みすすめるだろう。つまり、大雑把な言い方をすれば、対義結合が文学的、詩的であるのに対して、逆説はより論理的で散文的であるということができる。この違いを無視して、逆説を対義結合に含めることはできない。

以上の理由により、「逆説＝対義結合」説は成り立たない。

3 寄生的存在としての逆説

それでは、逆説という修辞型式はどのように解釈されるべきなのだろうか。われわれは、既に第一章において、従来の逆説の定義が二つの逆説的な問題を必然的に生み出してしまふことを確認した。が、このことは逆に、逆説のもつ本質的な性格を明らかにしているとも考えられるのである。つまり、「逆説は決して通念に代わることはできない」ということである。先の二つの問題は、いずれも逆説が通念に入れ代わろうとしたことによって起こったものであった。

第一章でも述べたように、逆説と通念とは不思議な関係にある。ある逆説に納得し、それを受け入れる人にとっても、その逆説が否定したはずの通念は生き続けるということである。しかし、見方を逆にしてみよう。ある言語表現が逆説としての修辞的效果を發揮するのは、あくまでもそれが否定する通念がしっかりと存在している時に限られるのではないか。つまり、逆説は通念を否定するものであるが、決して負かしてしまつてはいけないということだ。もし通念が敗北したら、その逆説は新しい通念となり、もはや逆説でも何でもなくなるだからだ。われわれは、キケロの『ストア派の逆説』にそのような例を見た。あるいは、「急がば廻れ」「負けるが勝ち」などの諺を思い浮かべてもらってもいいだろう。これらの諺は、外見は逆説の形を保っているが、もはや逆説としての説得力はもたない。もちろん、時にはわれわれの具体的行動を左右する説得力をもつこともあるが、それは逆説としての働きによるのではない。われわれは、ある場合には「急がば廻れ」が正しく、別の場合には「急ぐ時には最短距離をとれ」が正しいと考える⁽²⁰⁾。つまり、最初は逆説であったものが、その真実性を認められてしまったために、ある場合における通念として、元の通念と棲み分けてしまったのだ。このように、否定すべき通念を失ってしまった逆説はもはや逆説ではない。

要するに、逆説が逆説としての修辞的效果をもつためには、決して通念に成り代わつてはならないということである。もし逆説が通念に代わってしまったならば、その瞬間にその逆説は逆説としての説得力を失い、時の流れとともに真理の座に落ちていて、しだいに陳腐さと凡庸さの度を深めていこう。これが逆説でなくなった逆説の運命である。

ここで、ひとつの疑問が起こるかもしれない。「逆説は通念に代わることはできない」というのは、要するに条件(2)「しかしながら、よく考えてみると、真実を言い当てている」を否定することではないか。もし「真実を言い当てている」ならば、当然通念に代わることができるはずだからだ。そして、われわれは、逆説にとって条件(2)が必要不可欠であるということは何度も確認したはずだ。したがって、ここではどちらかを否定するか、あるいは修正を施して両立させることを考えなければならない。

そのために、もういちど通念は何かという問題に立ち戻ってみよう。通念とは、簡単に定義すれば「世間一般に共通した考え」ということになるが、それは決して生半可で

脆弱なものではない。いま「逆説は通念に代わることはできない」と言ったが、多くの通念にとってはそれは杞憂にすぎない。簡単に否定され、とって代わられるものなど、そもそも最初から通念にはなりえないからだ。ラオスベルク (Heinrich Lausberg) によれば、古代の修辞学校では、弁論家の教育として、逆説的立場を主張する弁論を行うという訓練が課されていたという⁽²¹⁾。これはもちろん、そのようなことが困難であるからこそ訓練になるのである。(プラトンの対話篇『パイドロス』⁽²²⁾の中で、リュシアスというソフィストが、「自分を恋している者よりも恋をしていない者にこそむしろ身をまかせるべきである」という逆説的な演説を名人芸でやってのけて、見物の喝采をうける場面がある。)このように、自明なものときれ、ほとんど信じて疑われない強固なもののみが通念たる資格をもつことになる。それゆえ、そのような通念を否定し、それと真っ向から対立する意見に出会ったとき、われわれは強い衝撃をうける。それは、それまで信じ切っていたもの、信じて疑わなかったものに疑問を呈された衝撃である。もっとも、その意見が、単に通念に反するだけのものであれば、その衝撃は一過性のものに過ぎず、われわれはそのような意見を奇矯で非常識な意見として葬り去るだろう。しかし、その意見が通念を一瞬疑わしめるほどの「真実性」をもっていたらどうか。それを聞いたわれわれが、「それも言えるかも知れない」「そのようなことがあるかもしれない」と認めたらどうだろうか。衝撃はより強くなって持続するだろう。これが逆説という修辞型式がもつ説得力の本質である。

だが、何度も繰り返すように、逆説のほうが「真実である」ということにはならない。逆説はわれわれに通念を一瞬疑わしめ震撼させる程度の「真実性」をもっているが、決して通念に打ち勝つことはない。なぜなら、逆説の説得力の強さとは、要するに通念にぶつかった時の衝撃度の強さにはほかならないからだ。したがって通念が強ければ強いほど逆説の説得力もまた大きくなる。ラ・ロシュフコーから、新しい例を引用して説明してみよう。

29 われわれの悪行は、われわれの長所ほどには迫害や憎悪を招かない。(Le mal que nous faisons ne nous attire pas tant de persécution et de haine que nos bonnes qualites.)

340 たいていの女の知性は、彼女らの理性よりもむしろ狂気を強める。(L'esprit de la plupart des femmes sert plus à fortifier leur folie que leur raison.)

個人差もあるだろうが、私にとって29の逆説のほうが魅力的である。なぜなら、340の逆説の場合、女性に限らず知性がつねに理性を強めるとは必ずしも思っていないからだ。それが狂気と結びつくことは当然ありうる。したがってこの逆説は私にはほとんど衝撃を与えない。このように、もし通念が逆説に弾き飛ばされてしまったら、逆説もまた一緒につんのめるのである。通念が降伏すれば逆説もまた滅びる。そのような実例をわれ

われは前にもいくつか見てきた。逆説が逆説であり続けるためには、常に強固な通念と共にいなければならない。逆説は、通念という巨大な存在に寄生することによってのみ、生き続けることができるのである。

- 注1 P. ヒューズ、G. プレヒト、柳瀬尚紀訳、『パラドクスの匣』、朝日出版社、(昭和54年)昭和56年、10ページ。
- 2 Henri Morier, *Dictionnaire de poétique et de rhétorique*. Paris/P.U.F., (1961) 1989, p. 849
- 3 Richard A. Lanham, *A Handlist of Rhetorical Terms*, Berkeley/Univ. of California Press, (1968) 1969, p. 71
- 4 e.g. Edward P.J. Corbett, *Classical Rhetoric for the Modern Student*, New York/Oxford U.P., (1965)1990, p. 457. Winifred B. Horner, *Rhetoric in the Classical Tradition*, New York/St. Martin's Press, 1988, p. 309. Olivier Reboul, *La rhétorique*, 《Que sais-je?》, (1984) 1990, p. 89. Henri Suhamy, *Les figures de style*, 《Que sais-je?》, (1981) 1988. p. 118f.
- 5 使用したテキストは以下のものである。La Rochefoucauld, *Maximes et réflexions diverses*, 《folio》 Gallimard, 1976.
- 6 使用したテキストは以下のものである。Cicero, *Paradoxa Stoicorum*, trans. H. Rackham, Loeb Classical Library, (1942) 1977
- 7 Cicero, *Paradoxa Stoicorum*, 4
- 8 三輪正、『議論と価値』、法律文化社、1972年、121ページ参照。
- 9 モリエヤランナムも、逆説と対義結合をほぼ同類のものとして扱っている。Morier, *Dictionnaire*, p. 850. Lanham, *A Handlist*, p. 69f.
- 10 Morier, *Dictionnaire*, p. 834. なお、対義結合を細分化し、文と文や句と句が連結する表現型式を paradoxism と呼んで、語と語が結び付く対義結合 (oxymoron) と区別する研究者もいるが、本稿ではすべてを一括して対義結合として扱う。
- 11 佐藤信夫、『レトリック認識』、講談社、昭和56年、157-8ページ。
- 12 佐藤信夫、『レトリック認識』、159ページ。
- 13 佐藤信夫、『レトリック認識』、160ページ。
- 14 佐藤信夫、『レトリックの消息』、白水社、1987年、223ページ。なお、瀬戸賢一、『レトリックの知』、新曜社、1988年、48、50-51ページも参照。
- 15 グループμ、佐々木健一・樋口桂子訳、『一般修辞学』、大修館、1981年、77ページ。なお、この本では、oxymore(仏)は撞着法と訳されている。
- 16 グループμ、『一般修辞学』、249ページ。また、以下の研究者たちにも同様の指摘がある。Corbett, *Classical Rhetoric for the Modern Student*, p. 457. Suhamy, *Les figures de style*, p. 119.
- 17 カイム・ペレルマン、三輪正訳、『説得の論理学』、理想社、昭和55年、197ページ。Chaim Perelman, *L'empire rhétorique*, Paris/J. Vrin, 1977, p. 149.
- 18 Reboul, *La rhétorique*, p. 90.
- 19 Harard Fricke, "Aphorismus", Gert Ueding Hg., *Historisches Wörterbuch der Rhetorik*, Band 1, Tübingen/Niemeyer, 1992, s. 774.
- 20 リチャード・ウエイトリーは次のように述べている。「箴言 (Proverb) は、それをを用いる人にとって、必ずしも普遍的な真理だと考えられているわけではない。それは互いに対立する箴言があることから明らかである。箴言は要するに、場合や事情によって正しかったり正しくなかったりするものにすぎない。(要約)」Richard whately, ed. Douglas Ehninger, *Elements of Rhetoric* (1828), Southern Illinois U.P. (1963) 1969, p. 394.
- 21 Heinrich Lausberg, *Handbuch der Literarischen Rhetorik*, München/Max Hueber Verlag, 1960, s. 58.

22 プラトン、藤沢令夫訳、『パイドロス』、岩波文庫、(1967年) 1988年。

(宇都宮大学 教育学部 助教授)